

五月人形の三段飾りは、最近では見る機会が減ってきました。上段の中央には甲冑または大将人形が置かれます。中段には陣太鼓、軍扇、陣笠が配置されます。そもそも陣笠とは、どのようなものだったのでしょうか。その特徴や歴史について調査してみました。



節句人形

素朴なギモン



陣笠（張抜製、黒漆塗り）

江戸時代～明治時代・19世紀 東京国立博物館所蔵
出典：国立文化財機構所蔵品統合検索システム
(https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/F-20259?locale=ja)

陣笠は元来、下級の武士・足軽が被るものだった

戦場に大量に送り込まれたのは足軽と呼ばれる雑兵だった。彼らは身分の低い兵士であり、武士の中でも最下層に位置していた。足軽は高価な兜を被ることができず、大量に生産された安価な陣笠を被って実戦に挑んだ。陣笠の形状は円錐形であり、素材は鉄・和紙・煉革（水に漬けて打ち固めた革）などで作られていた。鉄製の陣笠は、三角形の鉄板を8～12枚組み合わせで作られるも

のが大半であり、中には一から打ち出されたものもあり、高級品とされていた。和紙製の陣笠には二種類ある。一つは紙を粘土状に溶かして成型するもので、もう一つは複数枚の和紙を貼り重ねて作られる。和紙は軽量だが、厚く張り合わせた漆で仕上げると強度が増し、戦国時代に多く利用された。革製の陣笠は一枚の皮を木製の型で圧縮成型し、漆で仕上げたものが一般的だった。

武士用の陣笠は、センスを競った

江戸時代に入ると、武士が公用で外出する際に被る笠も陣笠と呼ばれるようになった。足軽が被る陣笠との違いは、個性豊かなデザインが多かったこと。身分の高い武士は季節や用途に応じて陣笠を変え、冬用や夏用、騎馬用、徒歩用などを使い分けた。足軽が被る陣笠はシンプルな円錐形だったが、武士用の陣笠にはさまざまな形があり、同じ鉄製や煉革製でも上質な漆が塗り重ねられた。表面は黒漆塗りが一般的だったが、深緑漆塗りや朱漆塗り、金箔押しなどもあった。また、裏の見えない部分に切箔を貼るなど、凝った意匠が施されたものもあり、センスを競い合った。

陣笠の裏側には、頭部に固定するためのあご紐

と共に、座布団と呼ばれるクッションが付いていた。これら江戸時代に上級の武士が用いた陣笠が五月飾りの陣笠のモデルとなった。そのため、張子製で金箔押しとした華やかなものが多く、馬場での使用を想定して、鞭とともに飾り台に置く形式が一般的である。



五月飾り一式（右端が陣笠）

昭和時代初期・20世紀 吉徳資料室所蔵